

「Visionary World Cup 2025を振り返って」

弁護士・慶應義塾大学大学法務研究科客員教授
宮武 雅子

2025年9月6日に淡路島で開催予定であったVisionary World Cup 2025は、台風の急接近という不測の事態を受け、急遽オンライン形式へと移行することとなった。しかしながら、その運営は極めて円滑かつ周到であり、あたかも当初より計画されていたかのような完成度をもって、対面開催に比肩し得る充実した大会として結実した点は特筆に値する。

私自身は審査員として初めて本大会に参加し、英語による交渉コンペティションの審査を担当した。そこで最も印象的であったのは、参加チームの水準の高さである。大学生・大学院生とは俄かに信じ難いほどの卓越した能力を示しており、少なくともハーバード型交渉法を十分に体得していることが明確に見て取れた。

さらに注目すべきは、野村美明名誉教授が提唱される、未来志向のビジョンを提示し共通目標の下で合意形成を図る「ビジョナリー型交渉」のアプローチが、実践の場において積極的に試みられていた点である。本コンペティションの事例設定が比較的共通目標を掲げやすい性質であったことも奏功し、各所においてビジョンを織り込んだ交渉が展開されていたことは、極めて意義深い試みであったと評価できる。参加者自身もその有効性を実感したことで、今後実務の場においてビジョナリー型交渉を採用する可能性は一層高まったと考えられる。

もっとも、交渉時間の制約も影響し、細部の確認が十分に行き届いていなかった点は惜しまれる。例えば、あるチームは相手方がほぼすべての論点に同意したと認識していたが、実際には一部論点における譲歩と引き換えに他の論点で調整がなされており、合意内容の構造が複雑化していた。その結果、どの論点がどの条件で合意されたのかについての整理と再確認が不十分であったため、認識の齟齬が生じたものと推察される。交渉技術の基本であるアクティブ・リスニングにおけるサマライジングを適切に実践していれば、このような誤解は未然に防ぎ得た可能性が高い。とはいえ、本コンペティションは成功体験と課題認識の双方を通じ、参加者にとって極めて学びの多い貴重な機会であったに違いない。

最後に、スタッフ各位による細部にまで配慮の行き届いた効率的かつ的確な運営に対し、深甚なる敬意を表したい。本来対面で実施される予定であった大会を、短期間のうちにオンライン形式へと移行するには多大な労力と調整を要したことは想像に難くないが、それを見事に成し遂げられた点は高く評価されるべきである。

今後、野村名誉教授の提唱されるビジョナリー型交渉術が、本コンペティションを通じてさらに広く普及・発展していくことを、心より願っている。